

# 創価大学の開学を語る —創立者の大学構想を中心に—

岡 安 博 司

## 1 はじめに

本日はありがとうございます。私に与えられた本日の講演のテーマは、「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」です。しかし、創価大学の構想、そして開学までの経緯と状況につきましては、既に小説『新・人間革命』の「創価大学」の章で創立者は詳細に書いて下さっております。

言うまでもなく、創価大学は創立者のご構想であり、そして、創立者が作られた大学です。したがって、創立者が書かれたことが真実であり、歴史という正史です。そして、そこには裏面史とか異説は存在しませんし、また、存在させてもならないと私は考えております。創価大学の開学には多くの人に関わりましたが、全て創立者のご事業の一部分を担ったものであり、創価大学の正史にいささかも変更を加えるものではありません。したがって、本日、私が話すことも、創立者が書かれている歴史の中で、創価大学設立準備財団の事務長、そして、開学後は創価大学の事務局長として経験したこと、また、それをめぐる思い出に尽きるものです。それは、雑談の域を出ていないとのお叱りを受けることを覚悟で、その中に、少しでも大学の正史を補完するもの、あるいは、証言となるものがあれば幸いと考えておりますので、あらかじめご了解いただきますようお願い致します。

## 2 開学までの経緯

### (1) 創価大学の淵源

創価大学の淵源については、創立者はいろいろな機会に書かれ、また語られており、多くの方が既にご存知のことです。しかし、創価大学について語る場合、やはりこれが大前提となりますので、若干、話させていただきたいと思えます。

創価大学の淵源につきましては、『新・人間革命』「創価大学」の章の冒頭で、以下のように明確に集約されて綴られております。

「1971年（昭和46年）4月2日午後、山本伸一は、総本山にある恩師戸田城聖の墓前で、深い祈りを捧げていた。……彼は、心で、戸田に語りかけた。“先生！ 本日、念願の創価大学が、遂に、遂に開学致しました。……伸一の胸には、微笑をたたえ、何度も、頷く戸田の顔がくっきりと浮んでいた。……」

以下、要約しますと、「牧口常三郎が自分の創価教育学を実践する学校を必ず作ろうと言っていた」「教育、とりわけ創価教育の実践に人類の未来がかかっている。ぜひ作りたい」「自分に作

れない場合は、戸田君が作ってくれると言われていた。」

私も小学校時代、戦時中の教育を受けました。「国のために死ぬことが最高に誉れである」と、教えこまれておりました。私の長兄は、満州の開拓義勇団へ行きました。2番目の兄は予科練に行きました。幸い、飛ぶ飛行機がなかったため、生きて帰ってきました。後1年か2年早く予科練生になっていれば、2番目の兄は死んでいたと思います。私は、幼年学校に行くということで、学内選考が大変厳しいものだったのですが、何とかパスしました。そして、受験日が8月中旬で、「いずれ連絡が来るから」と言われ待っていたのですが、とうとう来なかった。そしたら、敗戦となったわけです。当時の教育というのは、そのようなものでした。しかし、牧口先生はご存知のように、「教育というのは子どもを幸せにするのが目的である」と言われました。よって、国策に反する思想と信念を貫く牧口先生は、廃校になることが既に決まっていた小学校の校長に任命になり、同校の廃校と共に必然的に教員をやめられたと伺っております。創立者は、「結局は、ファシズムに騙されるのも民衆の問題である。だから、教育は大事だ。教育しかない」とよく語られます。

先師から託された創価大学の建設を戸田先生が池田先生に語られたのは、1950年（昭和25年）で、その日のことを絶対に忘れられないと、創立者は『新・人間革命』に綴られております。「最悪な事態のなかで、師は弟子に、大学設立の希望を語り、その実現を委ねたのである」と綴られております。

当時、戸田先生の会社の近くにあった日大の食堂で昼食をとられている時の話です。経済的に大変な困難に陥り、四面楚歌の時、戸田先生が「大学をつくろう。しかも、日本一、世界一の大学をつくろう」と、弟子に託したわけです。『新・人間革命』のその部分を以下に要約しますと、

- 〈1〉 池田先生が22歳の晩秋。
- 〈2〉 戸田先生が経営する会社が営業不振となり、正式に創価学会の理事長を退いた4日後のこと。
- 〈3〉 最悪の窮地の最中、戸田先生と池田先生の師弟は近くの大学食堂で昼食をとった時に、戸田先生は語った。
- 〈4〉 「人類の未来のために必ず創価大学をつくらねばならない。しかし私の健在なうちにできればいいが、だめかもしれない。伸一その時は頼むよ。世界一の大学にしようでないか！」

したがって、創価大学は三代の師弟の命をかけた共戦によって誕生した大学です。それが永遠に不滅の淵源です。

以下、項目を設けて話を進めてまいります。

## （2）土地の取得

創価大学を訪れる来賓がよく質問するのは、「なぜ、八王子の地を選んだのか」ということです。開学当時は、まだ、高速道路が建設中で、都心から車で3、4時間はかかり、かなり離れた場所という印象でした。その場所を選ばれた理由について、創立者は『新・人間革命』の中で明快に述べられております。

要約しますと、

- 〈1〉 1954年（昭和29年）9月、水滸会の野外訓練で氷川に向かう途中、八王子方面に通りがかった時に、戸田先生が「いつかこの方面に創価教育の城をつくりたいな」と言われた。師匠のその言葉を遺訓として、創立者はこの地を選んだ。
  - 〈2〉 大学の土地の条件として、
    - ①豊かな自然に恵まれ、広々とした所。
    - ②富士山に見える所。
    - ③都心の喧騒を離れ、冬は少し寒いぐらいの地。
    - ④（都心への）交通の便のよい所。
  - 〈3〉 八王子は〈2〉の条件を満しており、それに加えて、夕日が荘厳で勇者の気高さを感ずる地であること。
  - 〈4〉 八王子の名が法華経序品に出ており、知恵を持って世界を照らし、人類の幸福と平和を築く多くの人材を輩出する創価大学の使命を象徴している。
- 等をあげられております。

ある時、来賓の「なぜ、八王子を選ばれたのですか」という質問に対し、即座に創立者は、簡潔に次のように答えられておりました。

「大学は自然環境が豊かな所で、しかも文化の中心地と呼吸できる所が理想で、八王子がそれに叶っております」

大変短い答えでしたが、その来賓は納得された様子で、まさに名回答でした。私もその後その言葉を用いて、質問に答えさせていただいております。

次に質問されるのが、「いつから、この土地の取得を開始されたのですか」ということです。これにつきましては、開学間もない頃、創立者は少人数の懇談の席上、次のように話をして下さいました。

「私は第3代会長就任の強い要請があった時、何度もお断りしたが、どうしてもというので本当に苦しんだ。何に一番苦しんだかという、会長に就任した場合、創価学会を大きく発展させることは当然である。問題はその後何をやるかで悩んだ。そして、そのあとは、『大学』をつくろうと、決意が固まり、お引き受けした。だから会長就任の年（昭和35年）の秋には、土地探しを開始したので」（要旨）

最初に取得されたのが、今、創価高校のある小平市の土地です。しかし、「その土地は大学としては狭いので、高校の土地とした」と、創立者は語られました。当時の青年部は、そこで「豚汁をご馳走するから来なさい」ということで、お茶碗と箸を持って参集しご馳走になった思い出があります。玉川上水にそった雑木林で、当時は見渡す限り畑と雑木林で、はるかかなたまで見通せました。

そして、創立者は、創価大学の土地を先ほど述べましたような理由で八王子の土地の購入を進めていただきました。購入する際、さる会社が代理で土地の購入を進めましたが、当時、担当した方（故人）は、坪2～3千円前後とっておりました。バブルの時には、創価大学の土地が平均で80万円までになりましたから、大変安い時に獲得していただいたこととなります。

現在の創価大学の周辺地域は、昔は加住村という貧農地として知られておりました。ある地主さんが言っておりましたが、当時、生活できるだけの水田がなかったので、今の新しくできた女子寮（朝風寮）の辺りを切り開いて陸稲<sup>おかぼ</sup>を作っていたといいます。山の登り下りが大変で、しかも、雨が降ると、滑って登れなくなるため、大変だったと語っております。しかし、創価大学のために土地を売ったことで、農家の人たちにとっては大きな収入となり、その後アパート経営等もできるようになったわけです。「創価大学のお陰で豊かになりました」と、今は異口同音に感謝されております。

なお、この土地は、地震に強いといわれております。古老の話では、「関東大震災の時に周辺は各所に地割れが出来たが、大学の土地だけは被害がなかった」とのことです。

購入した時、ほとんどが雑木林に包まれた丘陵でした。創立者は、昭和42年5月7日（開学4年前）に、創価学会の各部の代表100名とこの地に来られ、モミジ、桜、ツツジ、梅、樺などの苗木を、雑木林を切り開いた場所に将来の夢と希望を託して植樹していただきました。1万6千本もの苗木です。現在のキャンパスの主な樹木は、この時の苗木をその後、移植したものです。

大学の建設工事が始まる前に、創立者は何回かこの土地に足を運ばれました。そして、ロマンの丘、つまり、今の本部棟のある所ですが、そこはキャンパスの中では一番高い所で、一軒の古い木造の小屋がありました。創立者はその丘の上に椅子を置かれてお座りになり、現在のキャンパス、そして、牧口記念会館の方に目を向けられ、かなり長時間、何かじっと考えられておられました。今にして思えば、現在の牧口記念会館を含め、キャンパスの構想はこの時にお考えになったのではないかと私は拝察いたしております。

### （3）大学設立構想の発表

創立者が大学設立を正式に発表したのは、創価学会の会長に就任されて4年を経た、1964年（昭和39年）6月30日に行われた第7回学生会総会です。私はその総会に出席してご構想を拝聴し、まさに晴天の霹靂でした。創価学会が大学をつくることは、当時は信じられないことで驚きでした。また、喜びに包まれたことを思い出します。ただ、その時は、私が創価大学の仕事をさせていただくようになることなどは夢想だにしませんでした。

翌1965年（昭和40年）11月、創立者を会長とする創価大学設立審議会が発足し、審議が開始されました。そして、その後、創価大学設立準備財団が発足しました。

### （4）設立準備財団の発足

既に存在する学校法人の創価学園がありましたから、学園が大学設立に取り組むのが一般的なケースです。これをせずに、別に設立財団を設けられた理由について創立者はこう語って下さいました。

「高校を併設している他大学を見ると、高校が大学の犠牲になっているか、逆に大学が高校の犠牲になっているケースが多い。だから創価大学と創価学園は財政的、組織運営的には別法人としてそれぞれが主体性を持ち、ただし教育はあくまで一貫教育でいくようにするのです」

創価大学設立審議会の審議も煮つまり、いよいよ設立を実行するために、「創価大学設立準備財団」が文部省の許可を得て、1968年（昭和43年）12月3日に設立されました。

以降、この財団が主体的に大学開設を進めていくことになり、不詳、私が事務局長に就任致しました。当時は私を含め男性2名、女性1名の3名での出発でした。

以後、設立準備財団が中心となって、準備を進めました。具体的な足取りとして、1969年（昭和44年）4月2日、起工式を行いました。それから、同年10月7日、定礎式。これには、世界135カ国の石を基底部に埋納しました。翌1970年（昭和45年）3月29日、教授会準備会が発足しました。そして、同年9月30日、文部省へ設立申請。翌1971年（昭和46年）1月6日、学生募集開始。同年1月26日、文部省より正式認可がおりました。経済、法学、文学、教員136名。同年2月11日、竣工式。同年2月18日～20日にかけて、入学試験。同年3月16日、落成開学記念パーティー。同年4月2日、開学式。同年4月10日、入学式と。

この間の経緯、概要については、『新・人間革命』に創立者が本質を踏まえ、適確に書き綴って下さっております。

『新・人間革命』の中で、創立者は、「当初、大学の開学は73年（同48年）にするとの計画もあったが、（創価）高校の1期生が卒業する71年（同46年）に、予定が繰り上げられた」と綴られております。

これについては、大学紛争が熾烈さを加える中であって、創立者としては1日も早く紛争のない大学を創り、世に模範を示したかったと語られております。「紛争のない大学」、これこそ創価大学の永遠の指針であり、魂です。その実現のカギとなるのが「学生参加」で、これについては学費値上げ問題に端を発し、いくつかの苦節を乗り越え、現在の「全学協議会」の理想的な運営体制が出来たことは、『新・人間革命』に書いていただいておりますので、ここでは触れません。

### 3 開学まで諸課題について

#### （1）経済・法学・文学の3学部が決まった経緯

開学するまでに、いろいろ課題がありました。まず、「どういう学部で始めるのか」ということです。経済・法学・文学に最終的に決定するわけですが、その経緯を簡単に申し上げます。

設立準備財団事務長に任命になった時、私は大学については全く素人で、五里霧中でしたので、まず、「創価大学設立審議会」のそれまでに審議した内容を確認するために議事録を克明に読みました。そして、特に次の3点が私の心に留まりました。

- ①創価大学は医学部を含めた総合大学を目指す。
- ②仮称「人間学部」を作る。
- ③通信教育を実施する。

これを前提として何を最初に開設するかを考えました。

#### 法学部について

準備財団が発足する以前に、既に、高松和男東北大学教授が創価大学の学長に就任することが内定しておりました。高松教授を中心に学術関係者で、審議会の下に実行委員会が出来ており、いろいろと具体的な検討が進んでおりました。

高松教授が上京の折、聞いたところ、「経済・経営・文学部」で出発することを既に決めているとのことでした。私は「経済と経営は近似的なものであり、経営学部でなく、法学部にす

べきではないか」と言ったところ、高松教授は、ご自分が経営学であることもあって、「経営学部をつくりたい。法学部は教授を集める自信がない」とのことでした。

そこで、創立者に伺ったところ、「法学部をまずつくるべきだ」と申されました。そこで、私が法学部の教授を必ず責任をもって集めることを約束し、高松教授の了解を取りました。確かに、法学部の教員を集めることは大変な難事でしたが、何とか揃える事ができました。

今思えば、1期生から司法試験の合格者を輩出し、既に117名に及び、そしてその流れが今日の法科大学院につながったことを思うと、感無量のものがあります。なお、経済学部の1期生からは公認会計士が誕生し、司法試験と同様、今日まで毎年合格者が出て、合計147名に及んでおります。

### 「人間学部」について

また、「人間学部」についてですが、創立者は『人間学部』を最初につくりたい」とのお考えでした。当時、他大学にまだ例がなく先駆的な発想でした。この件について、文部省にその開設の可否を聞いたところ、極めて厳しい反応でした。他大学に先例があると比較的認可を取るの容易ですが、新しいことについては強烈な抵抗にあります。

当時、東海大学で「海洋学部」という前例のない学部を文部省に申請した時、2度も不許可になり、3年目にやっと認可になったと聞いております。

「人間学部」のことで、文部省と押し問答をしていると、大学自体が誕生しませんので何よりまず必要なことは、「創価大学」を誕生させることであり、したがって、経・法・文というオーソドックスな古い皮の学部で開学し、中味に新しい水を入れ、軌道にのってから新しい学部開設に挑戦するしかないと判断し、申請を断念しました。

### 通信教育部について

それから、通信教育部についてです。これは何としてでもつくらなければと考えておりました。創立者のご構想は、牧口先生の創価教育の柱である、半日学校制度を現代に具現化する「通信教育部」の開設を一日も早く実現することにありました。それは、時代が強く求める「生涯教育」にも対応する重要課題だったのです。

文部省に行き、経・法・文3学部の開設と同時に、通信教育部をつくることにつき相談に行きました。すると係官は、言下に「それはダメです」と言うのです。私は、「どうしてですか？」と聞くと、係官は「規則で決まっています」と答えました。私はむっとして、「それでは、その規則を見せて下さい」というと、係官はびっくりして席を立ち、2～30分探している様子でした。今では、とうていこんな大胆な要求は言えません。

係官は席に戻ってくると、「申し訳ありません。規則はありませんでした」と謝ってきたのです(笑)。「ただこの件、上司に相談したところ、前例がないので断るよう言われました。その代わりに、第1回の卒業生が出たら申請して下さい。その時は必ず受け付けますから……」というので、申請をあきらめたわけです。ですから、開学5年後(昭和51年)に晴れて通信教育部は開設となりました。

今考えると、1年目から開設しなくて結果的にはよかったです。開設していたら、3学部の学生と通信教育部の学生を同時に募集しなければならなかったこと一点をみても、大変なことになっていたと思います。カリキュラムにしても教員組織にしても、既設の学部を土台として通教部を作るのが順序で、結果的に文部省の指導が正しかったわけです。

通信教育部が開設できた時、創立者は大変に喜んでくださいました。その時、通信教育部の機関誌を作ることが検討されました。そこで、名前を何にしようかということで、教員の有志の方に集ってもらい、そこで話し合ったわけです。しかし、いろいろな案が出ましたが、意見が分かれてまとまりません。最後に、ある先生が、『21世紀』がいいんじゃないか」というと、それでまとまりかかったのです。これで反論が出ないかなと思っていたら、別の教員が、「それは、梨みたいだ」と言われたのでまたダメになりました(笑)。そこで、創立者にお話すると即座に『ガッコウ』でいきなさい」と。私は驚きまして、「創価大学も学校ですが……」と言いましたら(笑)、創立者は、「そうじゃないんだよ。『学は光』ということだよ。ある哲学者の言った『無学は闇。学は光』の言葉だよ」と。それを委員会にはかりましたが、もう誰も反対せず、『学光』が雑誌の名前になったわけです。今や、「学光」は通信教育部の根本精神を示すモットーとなっております。

それから、当時は金融機関が近くにありませんから、スクーリングの参加者のために、郵便局が必要だったのです。それで、郵便局をつくり、それをご報告したところ、創立者は、「創価学会はいろいろやってきたけど、郵便局をつくったのは初めてだ」と大変喜ばれ早速預金していただきました。創立者が預金者の第1号です。

## (2) 設立資金について

次に、創価大学の設立資金についてです。これも、小説『新・人間革命』に詳しく書かれています。その一節を読みます。

「学校建設にあたり、山本伸一が最も苦心したのは資金の捻出であった。彼が会長に就任した当初、学会には、学校をつくるような財政的な余裕は全くなかった。だから伸一は、自分が原稿を書き、働きに働いて、学校設立の資金をつくろうと決意した。

創価学園の設立にも、伸一は自分の印税を投じたが、創価大学の開学に際しては、全印税7億円を投入したのであった。また、会長である伸一の出版物による学会収益の25億円も、大学の設立に使われた。

伸一は自分の生命を削ってでも、世界の平和を築くための大学を、人類の幸福を実現するための大学を、絶対に残さなければいけないと心に決めていたのだ。

しかし、設立資金は、約60億円を必要としていた。新たに学会本部からも寄付金16億円を投入することになったが、まだ足りなかった。やむなく寄付金を公募した。そして12億円が集まり、創価大学が設立できたのである。

寄付をしてくれた方々のなかには、質素な暮らしをしている学会員も少なくなかった。……伸一と心を同じくする民衆の真心によって、汗と涙の浄財によって、建てられた大学が創価大学なのだ」

設立のための資金は、創立者ただお一人で苦心され、壮烈な命を削る戦いがあったことを今、改めて知る時に、本当に申し訳ない思いでいっぱいです。ともかく、創立者は、大学づくりは、創立者ご自身の事業であり、誰にも迷惑をかけないとの決意に立たれていたと拝します。

そのことは、次の事例からも拝することができます。

- ・準備財団が活動を始めて間もない頃、聖教新聞を通して、創価大学建設を知った人たちが、「私もぜひ、池田先生の大事業のお手伝いをしたい。寄付をしたいので、口座番号を教えてください」という電話が入り始めました。

- ・この事を、創立者にご報告したところ、「創価大学は私の事業です。本部への寄付（財務）と混同させては申し訳ない。だからお断りしなさい」と言われ、お断りしました。そのうちに、「お前は何の権限があって断るのだ！ 先生への真心のご協力を断るとはとんでもない」と、私は怒鳴られる始末です（笑い）。そのことをご報告すると、「それでは、振込みでなく、事務所まで持参されたものはお受けするように」と、言われたのです。
- ・創立者の大事業にご協力したいという流れはどんどん強まり、『新・人間革命』に記されているように、その後、公募の形をとりました。積極的に募集を呼びかけたわけではないのですが、その金額は12億円にも達したのです。
- ・なお、このご寄付をさせていただいた方には、小さな桐箱に収めた「榿」の埋木の小片を記念に贈呈させていただきました。これは、創立者のご指示です。  
「文学の池」のところは、当時、田んぼでした。これだけの建物を建てるには、遊水池をつくらないと建築許可がおりないのです。そこで、遊水池として「文学の池」をつくったのです。工事にあたって、田んぼを掘り返したところ、榿の炭化した大木が2本出土しました。東大で鑑定していただいたところ、500万年前の埋木で、石炭には届きませんが相当に炭化しており、火をつけると、お線香のようにずっとともっていくものでした。それを記念品として贈呈することになったのです。昔、創大のキャンパスは、大木の繁茂する森林地帯であったことが、これで解かります。

### （3）教員の確保

次に、教員の確保についてです。大学ですから、当然、アカデミックな経歴を踏まれた教員を確保することが求められます。しかし、創立者は「創価大学は社会との接点が大事だから、実社会で活躍されて、かつ、学問的な力を持つ方も多く集めなさい。中核はアカデミックな教員として、それに、マスコミ、法曹界、金融界等で活躍した方で学問的にも力のある方を加えていくように」とおっしゃられました。もう一つとして、創立者は「若手の教員が必要である。というのは、青年は自分たちとあまり年が離れていない人の影響を強く受ける。親の言うことを聞かなくても、兄や先輩の言うことは聞くことはよくあることです」と。当時の創価学会の学術部には、大学教員の資格を持っている人は少なく、多少はいても、赴任校を離れるわけにいかない人もおりました。また大学ですから創価学会のメンバー以外の方も是非参加していただくよう努めました。

したがって、教員を幅広く紹介していただきましたが、なかなか来ていただくことができませんでした。文部省への申請に必要な教員の確保には、非常に苦心しました。歴史もない大学、しかも創価学会がつくる大学とあって、交渉しても頭から断る人、あるいは二の足を踏む人等、悪戦苦闘の連続でした。

おかげさまで、各分野の著名な方々も開学時の教授陣に加わっていただきました。しかし、国立大学、私立大学等を定年で辞められた方など、ご年配の教員の数が多くなって、若手の教員の数が薄くなってしまいました。それで、助手を採用することにしました。文部省的には、大学を開学する条件として、助手は必要ないのです。けれども、10名の方に助手をお願いして、創価大学に来ていただきました。

創立時に参加していただいた教員について、創立者は『新・人間革命』の中で、次のように



書いて下さっております。

「教員たちの多くは、創立者である山本伸一の建学の精神を分かち持ち、21世紀を開く大学建設の気概に燃えていた」

そして、何人かの教員の例をあげて下さっている。

- ・真剣にアラビア語を教える教員
- ・研究室を学生に開放する教員
- ・特に熱意に溢れている講師・助手の若手教員
- ・授業のほかに読書会を開く若手教員
- ・学生の進路や人生の在り方、恋愛などにも相談に乗った教員
- ・寝坊して休みがちな寮生へ指導激励する教員
- ・金を使い果した学生を、一家あげて歓迎し、食事をご馳走した教員

10名の助手の方々は、一人の女性の人は辞められましたが、それ以外は全員教授として現在活躍されております。

開学当時、創立者は、教員を10人ぐらいのグループに分けて、大学に来られた時、それぞれ懇談の機会を何回か持っていただきました。万葉の家などで行われたのです。必ずしも、最初から創立者の理念を承知して来られた方々ではありませんでした。特に、そのような教員と懇談をされました。その懇談を通し、創立者の人格に触れ、話に感銘し、構想に共感して、建学の理念に賛同し、尽力することを決意するようになった教員も少なくありません。

教員を集めるのに大変苦勞しまして、ここで一つの失敗談を紹介致します。ようやく教員の数が揃い、文部省に申請できるまでになりました。当時、就任予定教員の打合せ会を創価学会の本部の会議室を借りて行っていました。終了後、私は会議室の片付けをしておりましたら、本部の正門で創立者が私を呼んでいるという話がありました。それで、私は正門まで行きましたら、創立者から「こういう教員は知っているか？」と一人の予定教員について聞かれたのです。私は「T大学の助教授で、大変に期待している教員です」と答えました。すると、創立者は「ああ、そうか」とおっしゃるのです。創立者は、打合せ会を終えて帰っていく教員と門の所ですれちがい、その際一人一人に挨拶されたのです。その助教授について創立者は、それ以上は聞かれずに本部の中に入られたのですが、その時、創立者はなんとなく心配そうな顔です。私は「何かあるな」と思ったのです。早速、翌日T大学に確認すると、「そのような助教授はT大学にはいない」と言うのです。それで、私は本人に糾してみると、彼は「申し訳ない。騙すつもりはなかったが、事情があつて助教授になりすましていました。」というではありませんか。そこから慌てて、1カ月間で別の教員を探し、何とか申請に間に合ったという失敗があります。

創立者にそのことをご報告したところ、「そうだろうな。私は日本の大学教授というのは、必ずしも、世界レベルではないことは知っている。それにしても、この人は果して大学の教員かと思った」と言われました。創立者のおかげで助かった一つの例でございます。

『新・人間革命』の中に、次の一節があります。

「しかし、一部ではあったが、大学は、学会の会長である伸一とは、距離をおくべきだと言う教員もいたのである」

とあります。このような教員がいたことは事実です。「創立者はお金だけ持ってくればいいんだ。後は、一切必要ない」と言った教員がおりました。その話を聞いた学生自治会の役員をしていた学生数人が、その教員の所へ行き追及したのですが、「そんなこと言った覚えはない」と言い、言を左右に言い訳に終始しました。その教員は、就任当時は決して大学に協力的でありませんでした。しかし、その後、中国へ旅行した時に、中国では、創価大学の創立者池田先生が大変尊敬されていることを知り、そして創価大学の教員であることで大歓迎されたことにより、それから彼は、心を入れ換えいろいろな事に前向きに協力してくれるようになりました。残念ながら、その後ご病気で亡くなりました。

#### (4) 学生募集

大学には、研究と教育の二面があります。当時は、他大学では、国立大学をはじめ、多くの大学がどちらかというに研究に重点を置いている大学が多いと聞いておりました。これに対し、創立者は最初から、創価大学は「学生のための大学」「学生第一の大学」が永遠の方針であると打ち出されております。本学の教員の方々もそれに賛同され、そのように取り組んでいただきました。今、少子化の時代になって、「学生のための大学」という大学が増えてきておりますが、開学当時は必ずしもそうではありませんでした。

1期生として優秀な学生をどれだけ集められるかが創価大学開学前の最大の課題でした。ところが、文部省の構子定規の規則は誠に厳しく、正式の設立認可が下りるまでは、一切公式の学生募集はしてはならないとされ、当然、募集要項の配布も、広告、宣伝も許されません。しかも、その設立認可は、入学試験の行われる1カ月前という、考えられない遅さです。

幸い、創価大学は池田先生の創られる大学として、口から口へと伝わり、「ぜひ入学したい」、あるいは、「入学させたい」という気運が全国的に満ちて、認可の下りるのを今や遅しと学生や保護者の方々が待っていて下さいました。

これについて『新・人間革命』には次のように書かれております。

「(19) 71年(同46年)1月に文部省の正式な認可が下りたのである。……いよいよ(2月)18日から、入学試験が始まることになる。出願者は、募集に対して法学部が12.6倍、経済学部が15.3倍、文学部に至っては24.5倍という、新設校としては異例の高い競争率となった。

大学の職員は、多くの出願者があったことを、喜び勇んで、伸一に報告した。しかし、それを聞くと彼の顔は曇った。……できることなら、全員に合格してもらいたいというのが、伸一の真情であったのである。

その職員は、入試の出願者が多いということは、それだけ社会の評価も高いということであり、創立者ならば諸手をあげて喜ぶものと、思い込んでいたのだ。

それだけに、『かわいそうだ、かわいそうだ』とつぶやく伸一に、驚きを隠せなかった。

彼は、創立者の心に触れた気がした。それが、忘れてはならない人間教育の根本精神ではないかと、決意を新たにした」

ここで創立者のいわれている「職員」の一人は私です。そのことは今でも鮮明に覚えており

ます。創立者は無理は承知で、「3回入学試験に落ちた人は合格にしてあげられないのか」とまで、心情を吐露されておりました。これは、今でも変わらないお気持ちだと思います。

開学初年度の入学試験が終わり、教授会を経て合格者が決まり、その名簿をお届けしたところ、創立者に心から労をねぎらっていただいたことは今も忘れません。

#### (5) 開学以降について

開学以降につきましては、創立者が開学式と入学式にご出席されませんでした。その後、創立者を求める学生の熱意によって、創大祭、第3回入学式にご出席していただきました。これらのことについては、『新・人間革命』に詳しく書かれています。

#### (6) 学生寮について

創立者のご構想は、かつての旧制高校のように全寮制にして、そこを人間教育の一環とすることにありました。しかし、4年間の寮生活は、今の学生には耐えられないということで、「せめて1年間は寮に入るように」という基本的なお考えを伺いました。学生寮について、『新・人間革命』には次のように書かれています。

「創価大学の特色の一つは、学生寮を教育の場として、積極的に取り入れていたことにある。1期生は、8割近くが寮生であった。

かつての旧制高等学校がそうであったように、学友同士が寝食をともにしながら、深い友情を結び、人間的な啓発を図ろうと、大学をあげて、寮の充実に力が注がれたのである」

創立者のご構想にしたがって、1期生の大部分の人が入寮できる大きさの寮の設計に入りました。そこで、「寮はどのような構造がいいのか。また、その運営はどのようにすべきなのか」を教えてもらうため、他の大学を何カ所も訪れました。ところが、訪れた全大学から「寮だけは作らないほうがよい」というのです。当時、大学紛争の真最中で、寮は学生運動の拠点となり、メチャクチャにされておりました。閉鎖したくてもできない状況で、「絶対やめなさい」と異口同音にいうのです。

そのことを創立者にご報告すると、創立者のお答えは極めて明快で、そのことは『新・人間革命』に書かれています。

「……それは、寮の失敗ではなく、大学教育そのものの失敗であるといわねばならない。学生の自治に委ねた寮の運営が成功するならば、それは創価大学の人間教育の勝利である——創大の学生寮は、その決意から出発していた……」

そして創立者は、誰よりも寮生の激励に力を入れて下さいました。創立者は寮生と一緒に写真を取られたり、時には、将棋を指したりと、寮へ何回も足を運ばれました。また、寮祭（滝山祭）に出席されて、全力の激励を繰り返されたことは『新・人間革命』にある通りです。ここでは、『新・人間革命』に書かれていない私の失敗談をご紹介します。

当時、丹木寮という寮がございました。その寮が設けられた経緯を申しますと、創価大学が建てられたために湧水が濁り、お米が作れなくなったという苦情が数件、お百姓さんからありました。そこで、「アパートを造られたらどうでしょう。それを大学が借り上げます。そちらの

方が収入が多いはずです」とアドバイスしましたところ早速建設され、丹木寮ができたわけです。その寮名は大学の方で決めました。

創立者は、その持ち主が大学であろうと地主であろうと関係なく、学生が住んでいるということで丹木寮へ時々行かれ、激励されました。そこで、創立者は「何がほしい？」と言われ、寮生は「集会場がほしいです」と答えました。そして、創立者は「つくってあげなさい」と。また、「寮に何かあったほうがいいな。私の手元にある絵を掛けてあげよう」と。そのいただいた絵は洋画で、屋台で商売するご夫婦が描かれています。夫人の方は肝っ玉かあさんのような太ったしっかりした顔付です。夫の方はやせていて、目をしょぼしょぼさせている弱々しい姿なのです。創立者は「その絵を見れば、両親を思い出せるから」ということで(笑)。その絵は、大学で作ってあげた集会所にずっと飾ってありました。

それから15年経って家主との契約が切れました。それで、大学も手を引いたわけです。しかし、学生は途切れることなく入ってきました。契約している頃は、大学がいろいろ修理したりしていたのですが、契約が切れて以降、丹木寮はほとんど修理されないままになっていました。創立者はかなりたって再び、寮をご視察に来られたのです。そこで、創立者は、建物がすっかり変ってしまったのに驚かれたようです。その時開けにくいドアをガタガタと開けて痩せ細った学生が中から出てきた(笑)。その学生が創立者を見ると、「あっ、先生！」と(笑)。創立者は愕然とされまして、その夜、私は呼ばれて叱られました(笑)。「創立者にとって学生は自分の子ども以上に可愛いのだ。その心を忘れてはいけない」といわれました。それで、皆で真剣に検討し、再び、契約をしました。壊れている所は修理し、また、新たに管理者も置き以前より住みよい環境を整えました。丹木寮から優秀な人材が続々と巣立っております。その後、谷地川の改修があり寮の半分近くが削られたため、大学としてはやむをえず、丹木寮の運営から手を引きました。

創立者は寮生を激励するために全力で足を運ばれた例として紹介させていただきました。

#### (7) アメリカ創価大学のご構想

「アメリカ創価大学は、いつ、創立者が構想されたのか」は私には分かりません。私が最初に聞いたのは、日本の創価大学が開学して直後に、「今度はアメリカにつくろう。場所はロサンゼルスに」と言われたのです。その時、私はやっと創価大学ができて、ホッとしていた時でしたので、びっくりし、心の中で、「これは50年、100年先のことだろう」と不遜にも思いました。ところが創価大学が開学して10周年を迎えた時、創立者は「そろそろつくろう」とおっしゃられたのです。私は驚きました。それで、慌てて土地を探しにアメリカへ飛んだわけです。そして、ロサンゼルス郡のキャンパスに始まり今のオレンジ郡のアメリカ創価大学ができたのです。

#### 4 結びに

本日は、雑談的な回想が中心となり、誠に恐縮ですが、何か少しでもご参考になればこれに過ぐる喜びはございません。

『新・人間革命』の最終欄(103回)に次のようにございます。まず冒頭には、「人間の一生は、あまりにも短い。その人間が未来のためになせる最も尊い作業は、次代を創造する人を育て、人を残すことである」とあります。そして末尾に、「伸びよ、伸びよ、創価の大樹よ！ 永遠なれ、わが創価大学よ！ 私は、命の尽きる時まで、創大生のために、断じて道を開き続ける！ 教育の勝利こそ、人間の勝利であるからだ」と言われております。

私も創立者の師子吼になんとしてもお応えしたいと思っている一人でございます。もとより微力ですが、命のある限り、使命のある限り、創立者のご構想の実現に全力を尽くしてまいることをお誓いして、本日の私の役割を終わらせていただきます。

(本稿は、2004年12月15日の講演を加筆・訂正したものです。)